

「目と空気の介在者」

Geckoparade

あらゆる情報が、^{おん}音として認知される世界があります。そこでは、洋館は「よーかん」、装飾は「そーしょく」とすべての漢字は解体されます。ここでは、言葉は音でしか像を結びません。ところが、ものの形の表徴でもある漢字は、それ自体がある意味を伴って目に飛び込んできます。

故に、建築をみる時に与えられる文字情報は、ときに強い像を建築から遊離して結びかねません。目を落として読む情報、それを目を上げて建築と対照させる。その、確認作業に陥る恐れもあります。当然に言葉を与えていないものは、認知できないという限界も有ります。例えばこうした存在を、**名付けぬ質**とよんだ建築家もいました。
“Quality Without A Name”
Christopher Alexander

しかしながら建築の構成要素は、それぞれの機能的な役割を超えて、建築それ自体を演出する役割をもっているはずで、壁と柱、天井と床に包まれた空気そのものを見ることが出来ませんが、確実に有形なものとして漂っています。そうした問題意識をもとに、目と空気との介在者を通して、過去をまとった空気を見せる手段はないものかと考えています。眼のピントを空気にハッキリとあわせる、そんな方法への模索を以って、この問題に向かいたいと思っています。

さいしょにお伝えしたのは、目の見えない人の世界。点字における表記です。見えていることへの慢心で、見えてないものが多く有ることに気づくことができれば幸いです。

平成 29 年 10 月 12 日 企画者 × $\frac{1}{3}$ = 本橋仁

空気への印象



本間志穂（ピアノ演奏・美術作家）

島蘭邸の洋館部分は、馴染みのない風格を備えていて、既に舞台のように出来上がっている。そして文化財は確固とした存在で、時は止まったままだというイメージ。この場所で、止まったものと生きたもの（声や音）の出会いを大事にしたい。

古賀彰吾（演出家・パフォーマー）

島蘭邸に来て、上演を想定して内覧するも、サンルーム、書斎、奥の和室、重たい家具類。修学旅行で見学したお寺のように価値が固定化され、自分の向き合い方が受動的になっている。向き合い方を変える必要があるが「利用」、「対抗」、「共存」どれも違う。今はただ「警戒」して上演の形を考えている。

崎田ゆかり（俳優）

白い壁に整列した家具がとても質素な印象でした。今は人が住んでいないからか物が少ないことと、高い天井が空間を広く見せていたのだと思います。でも見学を重ねるうちに段々と小さく感じるようになりました。まだ発見していない島蘭邸の魅力を探しながら演技したいと思います。

家は何によって立ち上がっているのでしょうか。
ある場所があり、そこが個人的に占有されることによってもたらされる所作が生じる。更にそれらが蓄積してゆくとそのうち枠を超えていろいろなモノが結合し、ごちゃごちゃと私たちの前に立ち表れてくる。… そういうものなかもしれません。
そうだとすると、目の前にあるものは単なる断片にすぎず、本来の像は思わぬ方向に広がっているのです。ただ、正しく読もうとすることはあまり重要なことではないと思います。追いきれるものでもないからです。むしろ追いきれないことによって、いまここで、認識できるというものです。
何事も、様々な時間の寄せ集めです。その束ね方を少しかえると、新たな表情を垣間みることができそうです。我々ができるのはそのくらのことですが、そうすることでこの場所がより生きれば、本望です。

渡辺瑞帆（企画者・セノグラファー）

2017.10.12